Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-08-20

フォロワーの語りから構成されるリーダーシップの分析

小野，善生

(Degree)
博士（経営学）
(Date of Degree)
2003-03-31
(Date of Publication)
2010-08-11
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲2703
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002703

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【 44 】

氏 名 ・(本 籍)　　小野 善生　　(京都府)

博士の専攻分野の名称　博士（経営学）

学 位 記 番 号　　博い第91号

学位授与の 要 件　　学位規則第４条第１項該当

学位授与の 日 付　　平成１５年３月３１日

【 学位論文題目 】

フォロワーの語りから構成されるリーダーシップの分析

審 査 委 員

主 査　教 授　金井 壽宏

教 授　坂下 昭宣

教 授　石井 淳藏

論文内容の要旨

本論文は、フォロワーの側が認識するリーダーシップという現象に注目して、インタビュー調査による 3 社の事例研究に基づいて、リーダーシップの生成を理論的・実証的に明らかにしようとした研究である（ここで実証的という意味合いは、論理実証的に仮説検証するという意味合いではなく、フィールド・リサーチに基づくエンピリカルな調査研究を伴っているということを指す）。特に、これまでのリーダーシップ研究で比較的注目されてこなかったフォロワーの視点からアプローチで、彼らの語りを分析対象として、あわせてそれらを踏まえてリーダーたる人物本人の語りも重層的に生かしつつ、定性的にリーダーシップを分析することが、本論文の目的である。

論文の構成は、序章および結章を含み 8 つの章から成り立っている。

まず、序章では、本論文における問題意識の提示、本論文が依拠すべき社会科学の認識論的パラダイム、分析対象としての語りについての説明がなされている。具体的には、フォロワーが認識するリーダーシップ現象を明らかにするには、内部者の視点から現象を捉えるアプローチが望ましいと考えられている。このような点から本論文における議論の前提として、内部者の視点を重視する解釈主義のパラダイムに依拠し、より深いレベルで内部者の視点が理解できるフォロワーの語りを分析対象とすることが述べられている。

第 2 章では、先行研究の文献レビューがおこなわれている。ここでは、これまで展開されてきたリーダーシップ研究における様々なアプローチが、フォロワーの視点からリーダーシップ現象をどのように捉えてきたのかという観点から検討されている。リーダーシップ研究の歴史的な展開において、どのようにリーダーシップ現象が捉えられてきたのかをまず確認し、さらに、稀ではあるがフォロワーの視点を考慮したアプローチにとりわけ注目してリーダーシップ現象の新たな捉え方を探求している。先行研究の検討の結果、リーダーシップとはフォロワーによって社会的に構成されたものであると考える Meindl が提唱したリーダーシップの幻想によるリーダーシップ現象の捉え方に影響を受けつつも、それを発展させることが、本論文のアプローチであると示唆されている。

第 3 章では、本研究における調査方法について記述されている。調査方法としては、フォロワーへのインタビュー調査を実施し、著者による意味解釈によって語りの背景を解釈する。次に、語りの背景を理解した上で、フォロワーのリーダーシップに関する語りの抽出をおこなう。フォロワーの見解が明らかになったところで、リーダーへのインタビュー調査を実施する。そのうえで、リーダーとフォロワーによるインタビューデータの意味解釈を通じてフォロワーによって認識されるリーダーシップ現象を明らかにするというものであった。さらに、この章では分析対象としての語りに注目する理由が述べられている。人間は語るという行為によって、意味付与を行うという語りの特性に注目し、内部者の視点を理解するには、内部者の語りに耳を傾けることが重要であるとみなす本論文の立場がその理由として述べられている。

第 4 章から第 6 章までは、第 3 章で論じた調査方法に基づく事例研究である。第 4 章は、大手電機メーカーD 社電機部門人事部においてリーダーシップを発揮していると目されていた人物である T 部長と彼を信奉する 6 名のフォロワーに対するインテンシブなインタビューによる調査による事例記述がなされている。この事例では、特定のリーダーを信奉するフォロワーが、どのような点にリーダーシップを認識しているのか、それに対するリーダーの見解から明らかになるリーダーシップ現象について彼らの語りの分析による詳細な記述がなされている。

第 5 章は、グループウェア・ソフトの開発・販売を行っているベンチャー企業サイボウズ株式会社の創業者および創業初期のメンバーに対して行われたベンチャー起業家のリーダーシップに関する事例研究である。ここでは、創業期にあるベンチャー企業において創業初期のメンバーによって認識されるベンチャー起業家のリーダーシップとそれに対する起業家自身の見解が、インテンシブなインタビュー調査による彼らの語りの分析を通じて明らかにされている。

第 6 章では、エーザイ株式会社のアルツハイマー痴呆症治療薬アリセプトの開発チームにおけるチームリーダーのリーダーシップに関する事例研究がとりあげられている。創薬研究という専門性が高くなおかつ不確実性の高いチームにおけるリーダーのリーダーシップについてチーム・メンバーによって認識されるリーダーシップとそれに対するリーダーの見解が、インテンシブなインタビュー調査から得られた彼らの語りの分析を通じて詳細に記述されている。

第 7 章では、各事例におけるフォロワーのリーダーシップ認識とそれに対するリーダーの見解に関する記述がより体系的に分析され、そこから得られるインプリケーションについて議論がなされている。

結章では、これまでの考察結果をふまえて、事例研究で明らかになったリーダーシップ現象に関する結論が述べられている。この研究で達成された独自の貢献および今後に残された課題についても言及されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、フォロワーの視点を重視し、彼らの語りの分析を通じてリーダーシップ現象を明らかにするという斬新な視点と方法論を用いて、オリジナリティーをめざした理論的・実証的研究である。従来のリーダーシップを論であまり注目されてこなかったフォロワーの視点に注目することは、リーダーシップ研究の新たな可能性を追求するものであった。また、語りを通じた定性的研究の実施も、(解釈のあり方についてまだ荒削りなところは残すものの) リーダーシップ研究の方法論にあらたな展開をもたらすうえでも、あらたな試みを実践したといえる。

特に、本論文の主要な意義と貢献については、次の点に求められるのである。

第 1 の貢献は、これまでのリーダーシップ研究において、あまり注目されてこなかったフォロワーの視点に基づいて本論文は議論されているということである。リーダーシップ研究においてリーダーの存在ばかりが注意の焦点として目立つことが多いが、フォロワーがついていく意思があるかどうかということがリーダーシップ現象が社会的に生み出されるうえで必須である。このような点から、フォロワーの視点を重視してリーダーシップを研究するひとつの道筋を本論分が示した点を評価できる。

第 2 の貢献は、本論文における事例研究で実施された調査方法論にある。内部者の視点を重視するアプローチを目指した本論文では、インテンシブなインタビュー調査から得られたリーダーとフォロワーの双方の語りを分析対象としている。この語りによって、内部者の視点がより深いレベルで得られることができ、詳細なリーダーシップ現象の記述が可能になったのである。

第 3 の貢献は、なかなか収集が困難な重層的で貴重なデータによって事例研究がなされているということである。本論文で実践した調査方法は、複数のフォロワーから特定のリーダーに対する語りを得て、そこからリーダーの見解を聞きだすというものであった。この場合、リーダーとフォロワー双方にとって必ずしも都合のよい調査ではない。それにも関わらず、各事例において積極的にインタビューに協力を取り付け、良質なデータを得ることができたので、(分析や解釈のあり方は難渋をきわめたが) 資料的価値は高い。たとえば、アリセプトの事例は他のひとによっても試みられてきたが、このレベルまで詳細にリーダーシップを描いたものはほかに例をみない。

しかしながら、このような独自の貢献に彩られた本論文にも問題がないわけではない。

第 1 に、オリジナリティーのある研究であることから、リーダーシップ研究の分野でこのような方法論によって実践された先行研究例がない。そのため、本論文におけるデータの記述方法の解釈をめぐっては、完全なコンセンサスが得られたものではなく、より説得力のあるものにするという課題が残る。

第 2 に、リーダーシップ現象の記述に関して、リーダーとフォロワーによる間主観的な現実により焦点を当てる必要があるということである。語りに基づく社会科学的な記述がいかにあるべきかという大きな問題に答えきれていない。

第 3 に、本論文による分析結果が、どのように実践的な含意につながるのかという点に関して、より詳細な議論が必要である。

しかし、以上の問題点は、本論文の到達点を超えての今後の展開の方法を示唆するものであり、こられによって本論文の価値をはいささかも損なわれるものではない。

以上の理由から、審査委員は、本論文の著者が、博士 (経営学) の学位を授与されるに十分な資質を持つものと判断する。

平成 15 年 3 月 6 日

審査委員　主査　教授　金井壽宏

教授　坂下昭宣

教授　石井淳蔵